

「はしっこ」から発信!

～地域の底力・高知県柏島の「里海」づくり～

四国の西南端に位置する高知県幡多郡大月町・柏島。真っ青な海に囲まれたその静かな島で、地元の人たちや観光客をまきこみながら里海づくりに取り組んでいるのがNPO法人黒潮実感センターだ。センター長である神田優氏は魚類学者として海の生態系の保全に取り組みながら柏島の魅力を発信している。



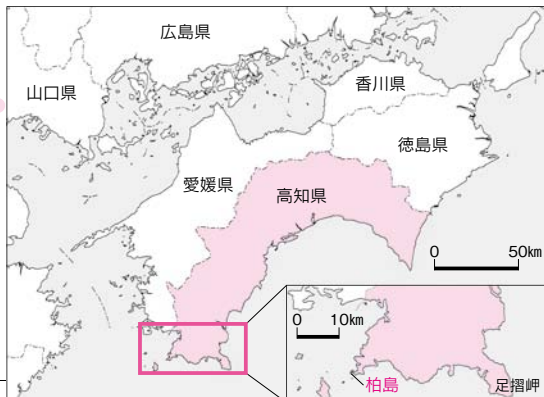
かんた 優センター長
神田 優

■柏島との出会い

大学1回生のときにダイビングに来て、そこで柏島の魅力にとりつかれたというか、すばらしい海があることに感動して、そこから柏島に通い始めました。もともと高知県の出身でしたし、海と生き物が大好きで魚類学者になりたいという夢もっていたので、遊びのダイビングだけではなく、柏島をフィールドとして魚の研究をしようと決めました。

■実感センター設立のきっかけ

高知大学の海洋センターの支所を柏島につくるという案が1996年にもちあがりました。私もそこで活動したいと思いましたが、大学法人化の影響で、翌年の1997年には白紙になりました。大月町も柏島の人々もとても残念がっていましたが、大学が来なくても柏島の魅力は何ら変わりません。それなら、民間や県立レベルで海洋生物の教育研究施設をつくればどうかという提案をしました。当時、大学院の博士課程を修了したばかりで、地元の人たちにしてみれば、予算も何もないなかで若いやつが何をゆうとるんやという感じでしたが、自分自身はだんだん本気で考えるようになってきて、1998年3月には高知市の家を引き払って単身柏島に移り住みました。そして廃校前の中学校で、校長先生に頼まれて環境教育を始めたのがスタートでした。2002年にNPO法人となりました。



周囲3.9kmしかないこの島には1000種類を超える魚が棲んでいます。これは沖縄や小笠原をしのいで日本一多く、また数も多い。さらにすごいのが、僕らが泳いでいっても潜っていてもこの魚たちは動じないし逃げない。この豊かな海こそが柏島のもつ一番の魅力です。それを見たときに、これまで人と魚の関係が非常にいい関係でつくられてきたんだと感じました。そこから、人と海が共存できる場所として「里海」という言葉をつくりました。「島がまるごとミュージアム」をコンセプトに、人と海がずっといい関係を続けていけるような、持続可能な里海のモデルをこの柏島につくっていかうと思いました。

■活動内容

人が海から豊かな恵みをもらうだけでなく、人も海を耕し、育み、守ることを里海概念ととらえ、おもに3つの活動指針を打ち出しています。まずは、「自然を実感する取り組み」です。私も含めてさまざまな研究者が海洋生物の調査・研究をするなかで客観的に柏島の価値を見出していく。その成果を地域の人や釣り客、ダイバーにわかりやすく伝えるセミナーを開催しています。とくに今一番力を入れているのが次代を担う子どもたちへの環境学習や体験・実感学習です。最近は修学旅行や高知大学での柏島学という講義などもあり、年間500～600人が訪れるようになりました。うれしいことに子どもたちは毎年リピーターとして来てくれて、高校生や大学生になると、ボランティアに来てくれることも多いです。学校の先生方の研修も行っています。

次に、「自然とくらしを守る取り組み」として、海洋環境を定期的に調査したり、サンゴや藻場の保全活動をしています。大勢訪れる観光客やダイバーの受け入れ態勢を整え、地元発のローカルルールをつくり発信していくことで、消費型の観

光地ではなくて、持続可能な環境立島をつくろうというスローガンを掲げています。

3つめが、「自然を活かすくらしづくり」です。いくら環境がよくても環境じゃ飯が食えない。これだけの豊かな自然があるからこそ自分たちの暮らしが成り立つという仕組みをつくろうと。そこで、豊かな漁場づくりのお手伝いや、これまで関わりがなかったダイバーや観光客と漁業者とが交流できるような里海市という物産市を開くなどしています。こうした3つの活動を回していくなかで、里海をつくりだしたいと考えています。

■藻場の再生を通して人々をつなぐ

島には地元の漁業者や、ダイバーや観光客などいろいろな立場の人がいます。どうすればお互いの信頼関係を築いていけるのかという部分で、両者をつなぐ役割を引き受け、長年葛藤してきました。例えば、2000年前後、きれいな海を求めて多くのダイバーたちが島を訪れるようになったころ、特産品であるアオリイカが釣れなくなった時期と重なったんです。イカが釣れない原因はダイバーにあると漁業者が言い出し、両者の間で衝突が生まれました。しかし生態調査を続けてきた私は、温暖化にともなう磯焼けによってイカが産卵する藻場が減少していることが原因ではないかと考えました。そこで、お互い喧嘩するのではなくて、漁業者とダイバーが一緒になってイカを増やそうと提案し、2001年からアオリイカの人工産卵床を設置する取り組みを始めました。産卵場所となる藻場をすぐに再生させるのは難しいため、地元の漁法をヒントに、海底に間伐材の枝葉でつくった産卵床を設置し、「海の中に森」をつくったんです。その役割をダイバーが担いました。この取り組みによって初年度から産卵床1本あたり最大7~8万個くらい産卵するという大きな成功を収め、それ以降にイカが増えています。漁業者もダイバーも一緒になってがんばったんです。この取り組みは12年続いています。今では大月町だけでなく、近隣の宿毛市や三原村、土佐清水市などにもこうした里海づくりの連携が広がっています。

■地元の人々の反応

あたりまえのように思っていた柏島の自然が高い評価を受け、それが情報として伝えられていくなかで、柏島に対する自信と誇りというものが芽



子どもサマースクールのシュノーケリング(左)と釣り体験(右)のようす

生えてきたそうです。その証拠に今私が着ている柏島Tシャツ(カシティ)はダイビングの部会でつくったものですが、すごく人気があって、島の人みんなほしいと買い求めて、県外に出て行った自分の子や孫に送ったりしています。自分の島の名前を書いたTシャツを、誇りをもって着られるということがすごくいいことじゃないですか。これがいろいろな変化の一つかなと思います。おじいちゃんやおじいちゃんがカシティを着て漁に行くようになりました。

■はっこの島から発信していくことの意義

柏島まで高知市内から電車と車を乗り継いで3時間以上かかります。もちろんコンビニもないし、情報が入ってくるのも早いとはいえません。そういう意味では都会の生活に比べれば不便ですね。しかし私は都会の暮らしそのものに疑問があります。現代社会は大量生産、大量消費、大量廃棄があたりまえになっていて、人が生活していくためには大量のエネルギーを使います。そうしたくらは長くは続かないし、別の価値観に気づかせてくれたのが3.11だったのではないのでしょうか。この島では、人と人、人と自然がとても近い関係にあります。両者が無理のない範囲で生活し続けていく知恵がこの柏島にはつまっています。何より、ほかにはない豊かな自然環境が広がっている。私たちが取り組んでいるような地域に根ざしたきめ細やかな環境教育ができるのは、この島だからです。柏島の自然に包まれて人と海が育んできた飾らない生活の知恵を、このはっこの島から発信していきたいと思っています。日本のほかの地域社会に元気を与えていきたいと思うし、柏島の里海づくりが持続可能な形で生活していくためのヒントになればいいなと思っています。そして、子どもたちに、この柏島の豊かな自然と生活の知恵というバトンをつないでいくのが私たちの使命です。